

つなぐ
tsunagu



表紙画像：福ふくの里(糸島市二丈)



特集 ユマニチュードを知る
第3回川柳大会作品結果発表

ご応募ありがとうございました
3月14日まで募集いたしました当企画に、おかげさまで42名の方にご参加いただき、99作品が集まりました。厳正なる審査の結果、以下の作品に賞をお送りします！

第3回
川柳大会
大賞発表

金賞 No.1
「やせました」 M.J様
医師の返事は
まだ肥満

入選 5点

- AIも 予測出来ない 子の成長 牧園様
- 三歩ほど 踏み出すつもりの 2026 おおまたあるき様
- 抱っこして 愛の重みと 腰の悲鳴 グルコサミン様
- 春一番 物価高を ふきとばせ あっち向いてホイ様
- 長生きで 孫の幸せ 願う日々 プチトマト様

医療法人 永寿会 **シーサイド病院**
シーサイド病院介護医療院
〒819-0165 福岡県福岡市西区今津3810番地
TEL 092-806-7171 FAX 092-806-5021

グループホームシーサイド…………… 092-806-9067
ケアプランサービスシーサイド…………… 092-805-7862
シーサイド病院訪問リハビリテーションセンター 092-806-7273
シーサイド通所リハビリテーションセンター

<https://www.seaside-hp.or.jp>

作品テーマ
『私の2026』
～楽しみにしていること～
銀賞 No.2
春を待つ まっつん様
背中に 大きな
ランドセル

事務長より
春の訪れとともに、小学生になるわが子の背中に大きなランドセル。新しい生活へのわくわく感と、成長への期待が温かく伝わってくる作品です。

銅賞 No.3
今年こそ あらたか様
痩せると言いつつ
食べ放題

院長より
誰にも覚えのある可笑しみがあり、素直でわかりやすく、リズムも良いですね。

たくさんのご応募ありがとうございました！入賞者の方には記念品をお送りいたします。また、院内でも作品の掲示を行いますので、ご来院の際はぜひご覧ください！



金・銀・銅賞の方には
福岡の
特産品を
プレゼント!!

※写真はイメージです 入選作品にはシーサイダー!

※院長の漢方薬講座は今号はお休みです。また次号をどうぞお楽しみに!





写真中央:イヴ・ジネスト氏 / 左2番目:日本ユマニチュード学会代表理事 本田 美和子氏

その人がその人らしくあるために

ユマニチュード®を

知る。

ユマニチュードとは

フランスの体育学の専門家イヴ・ジネスト氏とロゼット・マレスコツティ氏が、40年以上にわたる臨床実践を通して体系化したケア技法です。「見る・話す・触れる・立つ」の4つの柱を基本とし、主に高齢者ケアや認知症ケアの現場で実践されています。このケア技法の実践により、不安や興奮、拒否などの行動・心理症状（PSD）の軽減につながる可能性が報告されています。また、ケアの質の向上だけでなく、介護者の身体的・精神的負担の軽減や、安全で安定したケアの実践にも寄与するとされています。相手をひとりの人として尊重し、その人らしさを支えることを大切にしたいケア技法です。



魔法ではない、魂の対話 「ユマニチュード」が変える介護の景色

「なぜ、あんなに穏やかだった父が、介護をしようとすると怒鳴るのか」「良かれと思って接しているのに、拒絶されてしまうのはなぜか」

日本の介護現場や家庭で、こうした「すれ違い」に心を痛める人は少なくありません。認知症ケアの画期的な手法として知られる「ユマニチュード」は、そんな行き止まりの状況を打破する「哲学」であり「技術」です。それは単なるマニュアルではなく、「人間とは何か」という根源的な問いに向き合い、相手をひとりの人として尊重し、向き合うケアのあり方です。

このケアの根底にあるのは、「あなたは人間である」ということを伝え続ける信念です。認知症が進行すると、周囲は「危ないから」「汚いから」という理由で、本人の意思を置き去りにした一方的なケアが行いがちです。しかし、どれほど身体機能や認知機能が低下しても、自尊心や感情は最後まで残ります。一方的な介入は、本人から「ひとりの人間として扱われている」という実感（人間らしさ）ユマニチュードを奪ってしまいます。

ユマニチュードを実践することは、相手に「私はあなたの存在を認めている」というメッセージを、技術を通じて届け続けることなのです。

「ユマニチュード」との出会い

当院では今年より、ユマニチュードのケア哲学の本格導入に取り組んでいます。その背景には、現場の切実な思いがありました。きっかけは、副部長の福田さんが研修で目にした、とある映像でした。そこに映っていたのは、不穏状態の患者さんに向き合うイヴ・ジネスト氏の姿。口腔ケアを強く拒み、意思疎通も難しく、対応に疲弊する現場の様子がありません。

しかし、ジネスト氏がユマニチュードの哲学に沿って丁寧に関わると、数日後には患者さんがケアを受け入れ、最後には支えられながらも自らの足で歩き始めたのです。彼女は、ユマニチュードを学ぶ中で、医療従事者が良かれと思っただけで行っているケアが、知らず知らずのうちに患者さんのできる力を奪ってしまうことがあると気づきました。そして、介護度が高く寝たきりの方も多い当院にこそ、ユマニチュードのケアが必要だと感じました。入所者さん・患者さんたちのために、そして共に働く職員のために。

このユマニチュードが虐待防止の取り組みにもつながるのではないかと考え、所属する虐待防止委員会で、研修の学びを共有しました。

私もゼロからのスタートです。
一瞬に優しさを伝える
ケア技法を習得しましょう!



介護医療院副部長
福田 幸子
FUKUDA SACHIKO

今回、当院がユマニチュードを導入するきっかけとなった彼女に、話を聞きました。

職員の想いと、現場で抱えるジレンマ

このことをきっかけに、「ユマニチュード」が院長の目に留まり、あれよあれよという間に当院での導入が決定しました。

しかし、「ユマニチュード」のケア技術や成果は、一朝一夕で成しえるものではありません。

現場では、「本当に実践できるのか」といった戸惑いの声もありました。また、多忙な日々の業務の中で、新たな学びの時間を確保することも容易ではありません。

それでも、「入所者さん・患者さんたちの尊厳を守りたい」「より穏やかな関わりを実現したい」という想いが、私たちの原動力となりました。

人生最後のステージをお預かりしている当院だからこそ、できることがある——ケアの本質を改めて見つめ直すことが、次の一歩につながっています。

その第一歩として、今年の1月より九州大学と東京医療センターの研究に協力する形で、院内でユマニチュード研修を開始しました。多職種の職員が参加し、それぞれの立場から学びを深めようと取り組んでいます。ケアは技術であると同時に、姿勢でもあります。ユマニチュードの哲学は、当院の理念である「人間の尊厳と患者さんの立場に立った医療と介護」にも通じるものです。

試行錯誤を重ねながら、私たちはこれからも歩み続けていきます。

研修での具体的な取り組みや、実際に参加した職員の声については、次号で詳しくご紹介いたします。どうぞご期待ください。

